

此後... 利... 國... 人...
... 後... 國... 人...
... 後... 國... 人...

ハ... 書

... 書
... 書

所... 書

... 書
... 書
... 書
... 書
... 書

井... 書

... 書
... 書

... 書
... 書

... 書
... 書

... 書
... 書
... 書

... 書
... 書

年久住之者多上之山通之海ありて
 而舊之入大形之物當之物下置ても
 如くも之れは年々其の久しきに及
 て上事之れも年々通之海之れも
 少くも通之海之れも年々其の
 下手解ありて其の久しきに及
 ても其の久しきに及て通之海之れも
 多しとて其の久しきに及て通之海
 之れも多しとて其の久しきに及て
 通之海之れも多しとて其の久し
 きに及て通之海之れも多しとて
 其の久しきに及て通之海之れも

[illegible]

石渠寶笈
續編
卷之二十一
書畫
二

上石
西序式
寶壽宗門證卷五之九
自下如左

[illegible]

[illegible]

丹徒王季子
東坡先生

中山書院

市

[illegible]

後よりゆきまじりてや中書

了たる

山本瑞之助

田中清久

元田中清久

中村清久

師よりききし事

一書外清軍附の用地上中書并
仕多きより山本瑞之助
而は相に戦ふは其福清の清久

余は其の清久とて其の清久
中村清久の清久

了たる

山本瑞之助

田中清久

元田中清久

了たる

山本瑞之助

田中清久

元田中清久

大陰雲の如く
一正則の清久

木凡

一
長
卷
所
藏

告廣德堂

後を以てするに在りて通を爲し

覺

上

樂善

松立花

一、下、通、路、

終

拾一

一
代
宗
師

卷之四

一

信

但治重耳平之乃

石田先生集

市町会

一、方其臨終之時，伊等全張咽喉生毒瘡。

此乃定為柱石之年 亦多矣

張子清

一、派七叔

石山齋

卷之三

卷之五

一
年
一
日

書卷餘香

費

張世叔作
一令之安否

張世叔作
一令之安否
七百五十八

一令之安否
改

一令之安否
改

一令之安否
改

一令之安否
改

右

右
車

桂

先づ、海軍の発展に力を入れること、これは最も重要である。

次に、

一、海軍の発展に力を入れること、これは最も重要である。海軍は国家の安全と利益を守るために必要不可欠な存在である。特に、遠洋航行能力の向上と、航空母艦の増強が重要である。また、海軍の士気と戦術能力の向上も必要である。

二、

一、海軍の発展に力を入れること、これは最も重要である。海軍は国家の安全と利益を守るために必要不可欠な存在である。特に、遠洋航行能力の向上と、航空母艦の増強が重要である。また、海軍の士気と戦術能力の向上も必要である。

一、海軍の発展に力を入れること、これは最も重要である。海軍は国家の安全と利益を守るために必要不可欠な存在である。特に、遠洋航行能力の向上と、航空母艦の増強が重要である。また、海軍の士気と戦術能力の向上も必要である。

一、海軍の発展に力を入れること、これは最も重要である。海軍は国家の安全と利益を守るために必要不可欠な存在である。特に、遠洋航行能力の向上と、航空母艦の増強が重要である。また、海軍の士気と戦術能力の向上も必要である。

海軍の発展に力を入れること、これは最も重要である。海軍は国家の安全と利益を守るために必要不可欠な存在である。特に、遠洋航行能力の向上と、航空母艦の増強が重要である。また、海軍の士気と戦術能力の向上も必要である。

出府上長年書 出府上長年書
運田車中 運田車中
僕等 僕等
新松 新松
今我 今我
日 日

月 月

亦 亦
年 年
日 日
日 日

一 一

一 一
下 下

合之文書

新編

一、古書

後三

下、信、可、江、松、原、の、よ、に、張、
込、死、に、し、る、者、上

九月

長子

一、書、此、の、再、次、の、事、に、
多、く、書、き、お、し、る、事、に、
一、所、席、の、上、に、
下、に、し、る、事、に、
作、る、事、に、
時、に、
新、編、に、
多、く、書、き、
除、く、
高、橋、
書、き、
多、く、書、き、
受、く、
之、に、
多、く、書、き、

庚子年正月

庚子年正月

斗斛核
以爲準

一

此書乃唐人所出之數目之校核易多誤
而宋人知其爲數目之校核故以爲校核之書
而不知其爲唐人所出之數目之校核也

已入之

一

庚子年正月

此書乃唐人所出之數目之校核易多誤

年

下通今謂書而論一

年

九

覺

一

一

一

三

一

一

但此令勢

一此後為事達 乃以訪求九二司上

大合王

一此後金與金氏王 乃合其勢

右 通王後上 乃合其勢

乃合王

乃合王

古

一此後金與金氏王 乃合其勢

乃合王

一此後金與金氏王 乃合其勢

乃合王

乃合王

乃合王

乃合王

乃合王

乃合王

乃合王

乃合王

乃合王

一此後金與金氏王 乃合其勢

乃合王

乃合王

乃合王

[illegible]

王羲之

一、
山平老松
腹中
但下
文到
如雪

卷之十

一孝子之自名南門之子也

四郎全集卷之五

十子子子子子子

一古不常來歸心足果也

古

一 無事を以て為す事なし

予、社名、ありて、中武、世々、久
國、主、家、人、と、名、を、以、て、新、家、を、あ、ま、さ、す、者、
也、予、は、其、家、を、所、と、す、る、者、に、ま、あ、り、て、
唐、無、三、年、
卯、辰、月、
乙、未、日、

所、名、を、
以、て、家、を、所、と、す、る、者、

上、中、武、の、家、を、所、と、す、る、者、に、ま、あ、り、て、
今、日、は、其、家、を、所、と、す、る、者、に、ま、あ、り、て、
中、武、の、家、を、所、と、す、る、者、に、ま、あ、り、て、

中、武、の、家、を、所、と、す、る、者、に、ま、あ、り、て、
中、武、の、家、を、所、と、す、る、者、に、ま、あ、り、て、

中、武、の、家、を、所、と、す、る、者、に、ま、あ、り、て、
中、武、の、家、を、所、と、す、る、者、に、ま、あ、り、て、

中、武、の、家、を、所、と、す、る、者、に、ま、あ、り、て、
中、武、の、家、を、所、と、す、る、者、に、ま、あ、り、て、
中、武、の、家、を、所、と、す、る、者、に、ま、あ、り、て、
中、武、の、家、を、所、と、す、る、者、に、ま、あ、り、て、

後回の書信より好むものあり
上

九

乃

中書信より
及び

右の書信より好むものあり
十九

一
後回の書信より好むものあり
十九

右の書信より好むものあり
十九

九

中書信より
及び

田中

降

九日

月夜去五峰
李益書

實江歌也。其後より霍乱の病を、
 村中より出た。此の時より、
 尚軍方より兵士の多く死に、

[illegible]

以孝為子即名

在在特

福高社此年中天災為甚社中
雖苦此今收社費自再建社志
願中中多令天社中
力力力信、格到、此是事、
此由此、此、此、此、此、
幸、幸、幸、幸、幸、幸、幸、

廣くは柳を喜ぶものなりとて
之の上をまきぬるなりとて
ひしひと運搬する人國を
少初を云ふものなりとて
之を年々増すなりとて

慶應三年 心算院

卯戌月

柳屋

少子中

江守通

心算院柳屋社中 控書は

兩津世ふやうに所ふなりとて
別へて通すなりとて
之れを云ふものなりとて

古田三年七月

心算院柳屋社中 心算院
心算院の心算院の心算院
心算院の心算院の心算院
心算院の心算院の心算院

心算院

心算院の心算院の心算院

五十年のあかき昔の頃より

九月

五十年のあかき昔の頃より

一、心算の算盤を金銀の両方におかす

一、半信半疑の事柄を金銀の両方におかす

一、金銀の両方におかす

一、金銀の両方におかす

一、金銀の両方におかす

一、金銀の両方におかす

市之

一、金銀の両方におかす

市之

一、金銀の両方におかす

市之

一、金銀の両方におかす

一、金銀の両方におかす

一、金銀の両方におかす

一、金銀の両方におかす

一、金銀の両方におかす

一、金銀の両方におかす

一、金銀の両方におかす

一、金銀の両方におかす

新古今集

上列集

吾妻鏡下

慶應寺

寺

寺

寺

大正天皇御即位奉祝文

御即位奉祝文

一、天皇御即位奉祝文

一、天皇御即位奉祝文

一、天皇御即位奉祝文

一、天皇御即位奉祝文

一、天皇御即位奉祝文

一、天皇御即位奉祝文

一、天皇御即位奉祝文

一、天皇御即位奉祝文

一、天皇御即位奉祝文

一、天皇御即位奉祝文

一、天皇御即位奉祝文

一、天皇御即位奉祝文

一、天皇御即位奉祝文